

Title	イギリスに於ける海上保険業の發達：ロイド組合の歴史を通じて見たる
Sub Title	
Author	園, 乾治(Sono, Kenji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1932
Jtitle	史学 Vol.11, No.2 (1932. 7) ,p.13(159)- 49(195)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19320700-0013">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19320700-0013</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# イギリスに於ける海上保険業の發達

——ロイド組合の歴史を通じて見たる——

園 乾 治

## 目 次

- 一 序論——初期の海上保険
  - 二 ロイド・コーヒ―店時代
  - 三 ロイド組合の成立——アングースタイン時代
  - 四 其後のロイド組合
- 以 上

## 一 序 論——初期の海上保険

イギリスに於ける海上保険の歴史は其發達の上からロイド組合(Lloyd's)以前の時代、ロイド組合の成立より獨占の破壊に至る時代、獨占の破壊より現在に至る時代の三期に分つことが出来る。而して第

イギリスに於ける海上保険業の發達(園)

(一五)

一三

二の時代は更にロイド組合のコーヒー店(Coffee House)時代とアンガースタイン(Angenstein)時代に分つことが出来る。此論文に於ては、主として第二の時期に屬するロイド組合の成立より獨占時代を觀察し、更らに現在のロイド組合に論及したいと思ふ。ロイド組合の研究は、イギリスに於て獨特の發達を遂げたる個人保險業者の研究であると同時に、それは又イギリスに於ける海上保險業の發達を敍することになるのである。

イギリス國民は商業國民であると云はれてゐるが、エリザベス時代以前に於てはイギリスの商業殊に外國貿易は、殆んど外國人の手に依つて營まれた。ユダヤ人従つて又ハンザ商人とロンバード商人とはチュードル朝時代に起りたる大探險時代迄イギリスに於ける銀行業、保險業、輸出入業を司つてゐた。一三四八年死亡せるイタリーの歴史家ギオバニ・ビラニ(Giovanni Villani)の記すところによると、フィリップ・オーガスタス(Philip Augustus)の爲めに一一八二年フランスのゴールからユダヤ人が追放せられたる時、彼等は其財産を保護する爲めに海上保險制度を有してゐたと言はれる。其眞偽は姑らく措くとしても、一二九〇年エドワード一世が彼等を追放せる以前に、既に海上保險の慣行が存在したことは信ずるに足り、ユダヤ人がこれに關係してゐたことも殆んど確實であると言はれる。

ユダヤ人に次でイギリスに於て金融業に従事したる者は、ハンザ同盟の都市から移住せる商人であつた。(註、ハンザとは古代高ドイツ語にて人々の團體を意) 彼等が現在行はるるが如き海上保險を有したるや否やは

判然しないが、冒險貸借を行ひたることは疑がない。イギリスに於けるハンザ商人の中心地は、ロンドン、ボストン、リンの三ヶ所であり、ロンドンに於てはスチールヤード (Steelyard) が設立せられた。(註) スチールヤードは元來ギルハルダ・チエートニコラ (Gihulda Tentoni) 此スチールヤードは現在のキャノン街驛 (corum) と云ひ、Stuelhof, Stapelhouse, Steleyard, Stillhard 等とも稱した

のある處に設けられたもので、専用の倉庫及び事務所の一團で配給の中心であり、個々の商人は一緒にスチールヤードに住居し商業に従事した。彼等は現在の宗教團體に類似し、獨身生活を誓約し、嚴重なる戒律に従つて生活した。而して彼等の事業は繁榮し、併かも彼等の生活程度は蓄財を可能ならしめた。イギリスの國王は彼等に財政上の援助を求め、これが代償として彼等に屢々各種の特權を許容した。従つて彼等が非常に勢力を有するに至つたとは勿論である。彼等の與へられたる特權の中には、イギリスの重要産物たる羊毛の輸出の獨占、定額の租税を支拂ふ權利、テムズ河の海賊に對し積極的手段を講ずる義務の免除、自治の權利等があつた。國王の彼等に對する優遇と、金融並に外國貿易に對する彼等の勢力とは、他の商人殊にイギリスの國籍を有する商人の反感を高め、スチールヤードは事實上要塞を形成したのである。

イギリス商人の外國商人に對する反抗は十分な成功を齎さなかつたが、彼等は決してこれを廢しなかつた。國內のみならず彼等が外國貿易を爲すに至つた後に於ては、國外に於ても衝突が繰返された。一四〇三年イギリスの使節が紛争を解決する爲めにハンザ都市に派遣せられた記録がある。ハンザ商人は

イギリス商人が船舶や積荷を掠奪せることを訴へ、又イギリス商人はウィズマールやロストックの住民がイギリスの船舶を掠奪し、ベルゲンの居住地を攻撃せることを訴へた。これ等の紛争の或ものはハンザ都市に賠償金を支拂つて解決せられ、又或ものは一四七四年のウトレヒト條約に依つて解決せられた。解決の條件にはハンザ商人に一萬ポンドを支拂ふこと、當事者の一方がハンザ商人なる事件の判決をなす爲めに二名の判事を任命すること、ロンドンのスチールヤード及びボストンとリンとの居住地をハンザ同盟の完全なる所有地とすることを包含して居た。エドワード四世はハンザ商人から財政上の援助を受けることが尠くなかつたので、是等の讓歩を承諾せざるを得なかつた。併し乍らヘンリー八世はスチールヤードに反感を懷き、從來許容せる特權を剝奪し、次でエドワード六世も亦一五五二年に至つてハンザ同盟の多數の特權を剝奪した。然るにメリー女王時代に再び多くの特權を恢復せしめたが、更らにエリザベス女王はサー・ウィリアム・セシル(バーレーン卿)(Sir William Cecil) (Lord Burleigh) 及びサー・トーマス・グresham (Sir Thomas Gresham) の翼贊を得て一五七八年ハンザ同盟の有せる一切の特權を盡く徹廢し、翌年羊毛輸出の獨占權をも取消して了つた。これに對し斯かる命令が取消されなければ、リニューベックに毎年集會せるハンザ同盟の議會は、同盟の支配の下にある都市に設立せられたるイギリスのマーチャント・アドベンチュアラーズ會社の社員の退去を命ずることにした。其結果事態を一層紛糾せしめ、エリザベス女王は一五九七年二月二十八日を期してイギリスからチュートン商人を追

放する宣言を公にし、スチールヤードの閉鎖を命じて、其政策を貫徹した。斯の如くして數百年の間繁榮せるハンザ商人とスチールヤードは、一時イギリス商人の進出を阻止したとは雖、彼等がイギリスの外國貿易を著しく増加せしめたる功績は没すべからざるものがあり、又彼等の取引の方法及び慣習によつて利益せることも亦決して鮮少ではない。

ロンバード人も亦ハンザ商人と同時代にイギリスに於て活躍した。北イタリア乃ちロンバルディアは最古の商業の中心地であり、一三一八年に發布せられたるピーサ法令によればロンバルディアの諸都市には海上保險が行はれてゐることを示してゐる。フロレンスやジェノアは其著名なる例である。而してローマ教會と純然たる現世的國家との間の紛争によつて屢々北イタリアの諸都市は侵略せられるので、多數のロンバード商人は平和に生活し商業を營む爲めに、地中海沿岸及び南ヨーロッパの諸都市に多數移住したが、其中にはロンドンに移住したるものもあつた。彼等は何れの地に於ても本國に於けると同様の制度を樹て、ロンドンに於ては間もなくハンザ商人と同様に有力となつた。併し乍ら彼等の活動は貨物の輸出入よりも金融方面にあり、其富力によつてイギリスに於て一大勢力を占めるに至つたのであつた。ロンバード人がイギリスに移住する以前に於ては、ユダヤ人が金融を掌つて居たが、一二九〇年のユダヤ人追放によつて、ロンバード人とハンザ商人とが彼等に代つた。而して彼等は間もなくイギリス國王に對からざる資金を貸付け、遂にヘンリー四世から居住する特許狀と土地とを下附せられた。此土

地はピシヨップスグートとテムズ河との間にある泥濕地で、ロンドン市の當局者が無用の地として捨てて顧みなかつたところであつたが、ロンバード人は排水工事をなし、事務所と住宅を此地に建築した。これが現在のロンバード街として知られてゐる一帯の地である。

ロンバード人と海上保険との關係は、現存する記録によつて殆んど決定的に知ることが出来る。前に言及したるギオバニ・ピラニは一種の海上保険制度をユダヤ人が一二八二年考案し、これを其頃ロンバルデアに傳播せしめたと述べてゐる。加之、一三一〇年ブルージュに保険取引所が設立せられたと云ふクロニク・バン・フレンデルン(Chronyk van Vlaenderen)の記録(一七三五年發行)がある。ブルージュは北方のハンザ商人と南方のロンバード商人とが取引の爲めによく會合したところである。また海上保険を規定せるピーサ(一二四八年)、フローレンス(一五三三年)、バルセロナ(一四三五年)の諸法令がありロンバード人がこれを理解せることは殆んど疑がない。ゼラルド・マリーン(Gerard Malynes)の記すところによれば、一六二二年當時ロンバード商人が海上保険業をイギリスに於て開始し、これがイギリス商人の手を経てアントワープ及びオランダ地方に擴つたのである。(この事はジョン・ヘックマン(John Beckmann)の發明發見及事物起原の歴史(History of Inventions, Discoveries, and Origins, pp. 239—240)にも述べてある)。現在イギリスのロイド組合及び多數の保險會社の保險證券には、「本保險證券はロンバード街に於て作成せられたる最も確實なる保險證券と同様の效力を有す」との文言があり、アン

トワーブの當時の保險證券にも、これと同様の意味の約款があると言はれてゐる。

それは兎に角としてロンバード人の競争と其特權的地位とは、ハンザ商人に對すると同様イギリス商人の反感を買ひ、エリザベス女王のチュートン人追放の宣言は、ロンバード人には適用せられなかつたが、彼等の特權は著しく縮少せられ、僅にイギリス商人に都合のよい制限の下に於て事業を営み得ることとなつた。従つて彼等は徐々にイギリスの事業界から後退し、遂に全く其影を没するに至つた。斯の如くしてロジバード商人とハンザ商人とが、イギリスの外國貿易を殆んど一手に取扱ひ、従つて保險業をも取扱ひ、イギリス人は彼等から保險に關する思想と其實行方法とを學んだのであるが、總てを學び終ると其事業を自己の掌中に收める決心をなしたのであつた。

併し乍らロイド組合が成立したのは第十七世紀の後半に屬し、其成立する以前の百年間に於ては、海上保險は銀行業者、金貸業者、商人等の副業として經營せられ、何等の中央機關が存在しなかつたので、所有財産を保險に附さうと欲する商人又は船主は、斯る危険を喜んで引受けると知られたる人の許に、事務員又は特に依頼せる代理人を派し、而して保險證券が作成せられると、これに参加せんとする諸所の事務所及び個人の許に、引受金額と署名とを求める爲めに回送せられた。保險證券に署名をなしたる者は、引受金額を限度として個別的に義務を負擔し、其間には何等連帶責任を有しないのであるが、全額引受濟となりたる證券は、保險事務所に提出して登録を受ける。此保險事務所は一六〇一年よりも古



くから設立せられてゐた。併し其設立及び權能の詳細に就ては知ることが出来ない。恐らく登録を了せざる保險證券は無効であり、法律上強制力を有しなかつたものらしい。

## 二 ロイド・コーヒー店時代

既に述べたる如く初期の海上保險は、商人、銀行業者、其他副業として斯かる取引をなし得る者が引受けたのであつた。これは有名なるロンドンの大火の以前のことであつた。一六五二年ロンドン市に於ける最初のコーヒー店が開業せられ、これに倣ふものが續いて現れた。而して是等のコーヒー店に於て各種の商取引が行はれたのであるが、間もなくそれぞれ専門に従つて常連の集るコーヒー店が出来、廣い範圍に跨る場所を馳巡つて顧客を探求する無駄を省くことが出来るようになった。斯くして一度共同集會の便益が認められるや、コーヒー店は一大商取引の中心となつた。古い新聞によると是等の店舗には、銀行業者、株式仲買人、フランス人、ユダヤ人、並に其他の商人や紳士が出入したと言はれ、報導を流布し、政治上の出来事や人物を論評し、政治上の意見を撒布し、噂を交換する場所となり、また多くの場合に於て騒動や流言蜚語の發生地であつた。それ故政府は彼等に對して好感を有せず、一六七五年に至つて、チャールズ二世は法令を以て一切のコーヒー店の閉鎖を命ずることとなつた。併し乍ら此法令の制限は、發布後十六日にして條件付で撤回せられた。其條件と言ふのは、店主は下劣不眞面の

新聞書籍等が店内に於て披讀せられることを禁止し、政府並に當路の大臣に反對する虚偽又は不眞面なる報導の報告又は宣傳を防止することであつた。

既に述べたるが如くそれぞれ商取引の種類に従つて最負とするコーヒー店があつたが、タワー街にあつたロイド・コーヒー店には海運業關係の者が集つた。それは同街がロンドン市に於ける重要街路の一であつたのと、テムズ河に接近してゐたことに原因し、而して後は至り此コーヒー店が海上保險業の第一の公認せられたる中心となつたのである。蓋し船長達と船舶及び運送に關係せる商人達とが屢此店舗に集るといふ事が、外國の事情に關する新しい報導を得る爲めに、其處に集る習慣を生せしめたのであるが、また商取引を纏める爲めに此處に集つたことも容易に想像が出来る。勿論當時のロイド・コーヒー店は専ら保險業者の爲めに盡したのではなく、備船者、荷送人及び商人等の爲めにも盡した。ロイド・コーヒー店が斯の如き事業に關する正確なる新しい報導を得る場所たることは大ひに歡迎せられ、且つエドワード・ロイド(Edward Lloyd)は外國にある人との通信の道を開き、顧客に有益なる一切の事柄に關して迅速なる報告を得る手段を講じた。

ロイド・コーヒー店に關する最古の記録は當時の唯一の新聞たる一六八八—九年二月十八日と二十一日のロンドン・ガゼットのの中にある(一七五〇年に至るまで新年は三月二十六日に始まる。それ故に一六八九年二月發行の書類には一六八八年の日附がある。誤解を防ぐ爲めに二重日附とするのである。)エド

ワード・ロイドに關係せる記事は、遺失物の發見に對する懸賞廣告が最も多かつた。又船舶から脱走せる者に關係の廣告もあつた。而して殆んど總てエドワード・ロイドの處に海員及び商人が其要求を廣告する爲めに訪れたことを示してゐる。彼の店舗には多數の人が集り、其一部の者は單に報導又は噂を聞く爲めに來たのであつたかち、眞に商取引を爲さんとする者だけに限る爲めに、一ペニーの入場料を徴收した。當時此店舗に於て行はれたる取引の最も主なる物の一つは、船舶及び積荷の賣買であり、一六九八年にはそれは永久的日常の一特色となるに至つた。勿論、此處で賣買せられた品物は、殆んどあらゆる種類に互つたが、大部分は船舶及び積荷であつた。

一六九二年エドワード・ロイドは、其店舗をタワー街からロンバード街とアップチャーチ路の角に移轉した。これはロイドの事業の大いに發展したることを示すのであつた。勿論この移轉によつて海員の一部の顧客を失つたであらうが、ロンドン市の商業の中心に非常に接近するに至つたので、前よりも多數の商人が集り、新しき店舗は益々好評を博するに至つた。而してロイドの店舗はエドワード・ロイドの死後も長く此處に止まり、一七七〇年二度目の移轉をなす迄動かなかつた。

ロイドの名は世界最大の保險機關として知られてゐるが、ロイド・コーヒー店の起原及びエドワード・ロイド自身の生涯に就ては知られる處が極めて少い。前に述べたる新聞の廣告もロイド・コーヒー店の起原を物語るものではない。それは從來の所説によればロンドン大火後一二年の内乃ち一六六八年頃で

あらうと言はれてゐる。併し乍らチャールズ・ライト (Charles Wright) 及びアーネスト・ファイル (O. Ernest Fayle) の最近の研究によれば、エドワード・ロイドの出生は多分一六四八年頃である。それ故に一六六八年には彼は未だ二十代であるから、コーヒー店の主人たる年齢でないのみならず、教會の記録に徴すれば、彼がロンドン市内に住居を定めたのは一六八〇年頃で、當時既に結婚生活に入り二兒を有してゐたことも知られる。従つてコーヒー店の開業は恐らく一六八九年を去ること遠くない頃であらうと言はれる。又彼が一七一三年二月十五日に死んだと云ふ事實も、セント・メリー・ウールノス教會の記録に依つて最近知られた。此最近の發見によつて従來ロイド・リスト (Lloyd's List) は彼が創刊したものだと云ふ所説があつたが、それは一七二六年に初號を發行したのであるから、事實と符合しないことが判つた。尤も其前身であるロイド・ニュース (Lloyd's News) はエドワード・ロイドが顧客の爲めに、彼が蒐集し得たる一切の船舶の發着、一般海運狀況、其他、事業に關係ありと思はれる内國及び外國の事件を採録したものであり、始めは筆記によつたが、一六九六年印刷によつて一週三回發行した。然るに議會の議事に關する記事の爲めに官權の抗議に遭ひ、エドワード・ロイドは上院に召喚せられ、次號に於て正誤を命ぜられたが、彼はこの要求を拒絶し、印刷することを停止し、爾後は筆記して店内に於て回覽することとし、彼の死後に於ては其後繼者がロイド・リストの創刊せられたる一七三四年に至る迄其慣行を繼續した。

エドワード・ロイドの經歷は詳細が不明である爲めに、彼の性格及び學識を十分批判することは出来ないが、彼が普通のコーヒー店の經營者以上の才能と教養とを有つてゐたと想像しても無理ではない。彼の事業慾が航海及び通商界の重要な部分を惹付ける方法に於て彼の店舗を經營せしめ、又顧客に對して有益なる報導を提供する爲めに、遠隔地の人々と廣く通信を交換したる事實は、彼が事業に對して十分なる理解を有せることを示すのである。彼が文章の才を有し又組織の才を有せることは、ロイド・ニュースの發行によつて明かであり、正誤文を公にするよりも印刷を廢止せるは、如何に彼が意志の人であるかを物語つてゐる。又彼が頗る用意周到であり節儉を重んじたかを示す事柄もある。彼が死の床に於て、コーヒー店の經營を繼承する者として指定せるウィリアム・ニュートン (William Newton) と彼の娘との結婚を定め、又彼の埋葬費用としては三十ポンドを限度とし、既に彼の妻の埋葬の際一切の儀式を終へたから、これを繰返すに及ばぬことを遺言してゐる。併し乍ら以上述べたる以外には、エドワード・ロイドの性格を示すべき事柄はない。然かもこれ以上事實の鑿穿を行ふ必要はない。彼は單なるコーヒー店以上の事業を建設し、假令彼の事業が現在の如く一大組合に發展せずとするも、彼の名聲はロンドン商業史上に於て不朽のものとして残つたであらう。

エドワード・ロイドの死後、コーヒー店はウィリアム・ニュートンに依りて同様の方針を以つて經營せられ、其後他の人々に依つて經營せられた。併し乍ら多數の店主の姓名は記録に残つてゐない。事實店

主の何人なるかは事業機關に比較すれば重要でなく、遂に店舗の支配權は盡く保險業者の仲間がこれを握り、彼等はマスターを任命してコーヒー店主の義務を行はしむるに至つた。

イギリスに於て海上保險會社の組織が商業の發展に如何なる役割を演じたか。それに就ては此處で詳論する必要はない。併し乍ら此處でエドワード・ロイドの死後に於けるロイド・コーヒー店の歴史を辿る爲めに、イギリス最初の二大保險會社たるロンドン保險會社(London Assurance)とローヤル・エキスチェンジ保險會社(Royal Exchange Assurance)を出現せしめたる事情と、一百年に互る獨占を發生せしめたる事情とを述べなくてはならぬ。

海上保險の必要を痛切に感せしめたる事件は十七世紀の終に發生した。長い間のフランスとの對戰によつてイギリスとオランダの通商はフランスの海軍の爲めに壓迫を受けたが、一六九三年五月には地中海とレバント方面に出向したる商船が、フランス軍艦の爲めに擊沈又は捕獲の運命に陥つた。其損害は殊にオランダ側に多大であつたが、イギリス側に於ても商人及び保險業者の損害は莫大で、ロンドン全市民を實際に驚倒せしめた。而して彼等を救濟する法案が議會に提出せられ、一六九四年二月下院に於ては第三讀會を通過したが、上院に於ては第二讀會に於て否決せられ、營業的保險業者は自ら債權者と協定をしなくてはならなかつた。

次で一七一七年再び海上保險會社を組織する思想が勃興した。此當時に於てはイギリス全土は舉げて

投機熱に浮かされてゐた。有名なる南海泡沫會社が建設せられ崩壊したのは此時代である。この投機熱はイギリスからフランスに脱走せるジョン・ロー(John Law)がミッシンッピー會社の建設に成功したることから起つた。而して一度投機熱がイギリスに傳播すると、致富のあらゆる計畫が行はれ、杜撰なる事業計畫に對しても、人々は發起人の求める資金を熱心に用意した。あらゆる種類の事業が喰物にせられた。それ故に保險業特に海上保險業に注意が向けられたのは何等不思議がない。マーサース・ホール海上保險會社(Mercers' Hall Marine Insurance)の計畫を始め、殆んど一百を數へる會社が設立せられたが、其中には保險業の經營を目的とせざるものも少くなかつた。而して眞にロイド・コーヒー店の保險業者と競争する爲めに設立せられたるものは僅かに五社であり、其中に於ても實際に事業を開始せるものは、ロンドン保險會社(London Assurance)とローヤル・エキスチェンジ保險會社(Royal Exchange Assurance)との二社に過ぎなかつた。

これ等の會社を組織する最初の計畫はビルングスレー(Billingsley)が一七一六年資本金一、二百萬ポンドを以て特許狀を得て組織する一種の公共保險會社の設立計畫であつた。此提案に對してはロイド・コーヒー店の保險業者から猛烈なる反對が試みられ、且つ査問會の報告も其設立に反對であつたので、政府も許可することを拒絶した。併し乍らこれによつて直に一切の計畫が消滅したのではない。オンスロー卿(Lord Onslow)とチェトウインド卿(Lord Chetwynd)とによつて新しき計畫が上院に提出せられ

た。前者はビルングスレー (Billingsley) の計畫に参加せる者がこれを支持し、ロイヤル・エクスチェンヂ  
保險會社として繁榮せる會社と關係し、後者は有力なる多數の商人の支持を受けラムス保險會社として  
知られる計畫に参加した。この會社の名前は主要なる發起人の一人の名を冠したのであるが、後にロン  
ドン保險會社となつた。而してこれ等二個の計畫は斷然たる反對に遭遇し長い間審議せられたが、結局  
兩會社共三十萬ポンドをジョージ一世の内帑に獻納することを約し、一七二〇年六月二十二日に至つて  
特許狀が下附せられた。而して兩會社共にロイヤル・エクスチェンヂに於て業務を開始し、ロイド・コー  
ヒー店の保險業者と共に一百年間海上保險業を完全に獨占した。併し乍ら兩會社は三十萬ポンドの獻納  
に困難を感じ、數回請願書を提出したる後、十五萬ポンドに減額せられた。

兩保險會社の出現はロイド・コーヒー店の保險業者に大なる影響を及ぼさなかつた。海上保險業の凡  
そ十分の九は獨占時代を通じて彼等の手にあつた。それ故にウィリアム・ニュートン及び其後を繼承せ  
るサムエル・シェップアード (Samuel Sheppard) の時代にもロイド・コーヒー店は繁榮し、益々専門化し  
て行つた。新聞の廣告が其間の事情を物語つてゐる。而して一七二六年には、ロイド・リスト (Lloyd's  
List) の初號が發行せられた。これは今日迄存続し、海運に關する主要なる日刊新聞で、海外貿易、海  
運、海上保險に關する殆んど總ての事項に就て正確詳細なる報導が多數掲載せられてゐる。この當時存  
在したる唯一の他の新聞はロンドン・ガゼットであつた。一八八四年ロイド・リストは海運通商雜誌ロイ



ド・リスト(Shipping and Mercantile Gazette and Lloyd's List)とその名稱を變更し、一九一四年まで繼續した。此年ロイド組合は個人商會の手にあつた印刷局で發行の權利を繼承し、又ロイド・コーヒー店は海運雜誌の支配權を獲得した。此新聞は今日ロイド・リストとして發行せられ、ロンドン・ガゼットに次で現存する最古の新聞である。

ロンバード街とアップチャーチ路との角にあつたロイド・コーヒー店は、經營の首腦者を變更すること數次であつたが、同じ名稱の下に一七六九年まで持續した。然るに此處に出入する者の中に不眞面目の投機者があることは、信用ある商人及び保險業者に取りて有害であり、店舗に對する不信によつて彼等の信用が害せられ、又喧騒なる賭博者があることは合法的保險業に何等の利益がないので、ロイド・コーヒー店の顧客の信用ある一團は、一七六九年の初頃、斯る好ましからざる仲間から分離する決意をなし、トーマス・フィールドینگ(Thomas Fielding)を經營者の中心としてポープス・ヘッド・アレー五番地(5, Pope's Head Alley)に新ロイド・コーヒー店(New Lloyd's Coffee House)を設立した。それは一七六九年三月二十一日のことで、間もなく新ロイド・リストを刊行するに至つた。これは古いロイド・コーヒー店にとりて脅威であつたが、此裡には新ロイド・コーヒー店を支持する多數の組合員が存在せること勿論であつた。而して是等の組合員がロイド・コーヒー店の事業機關としての中心生命をなす者であつたので、古きロイド・コーヒー店は漸次衰微の傾向を辿る外なかつた。

ポーブス・ヘッド・アレーに移轉したる新ロイド・コーヒー店と、ロンバード街の古きロイド・コーヒー店との間には、其經營者の間に反目があつたのみならず、其本質に於ても非常なる相異があつた。而して新ロイド・コーヒー店は、移轉後間もなく多數の保險業者及び仲介人を容れるに足る事務所を見出さんと努力し、一七七三年に至つて、遂にロイヤル・エクスチェンヂに移轉する事になつた。其處は建物が焼失し再築せらるゝ迄の短期間を除き、最近に至る迄ロイド・コーヒー店の安住地をなしてゐた。ロイヤル・エクスチェンヂに移轉先を決定するに就ては、一七七一年主要なる組合員の一人であるマーチン・クイック・バン・ミローップ (Martin Kuyck Van Mierop) が會議を招集し、七拾九名の出席者を得て、新ロイド組合の設立を決議し、各自百ポンドを醸出した。併し乍ら容易に適當なる場所を見出すことが出来ないで再び集會が催され、バン・ミローップを議長として五拾四名の出席を得、其處で九名より成る委員會を組織し、何れの五名を以てしても移轉問題を實行し得ることとした。

一七七三年委員會はフリーマンス・コート of 建物を百ポンドを以て借入れることとしたが、ジョン・ジュリアス・アングースタイン (John Julius Angerstein) は此計畫に反對し、事務所をロンドン市の中心に置くべき必要を感じ、遂にロイヤル・エクスチェンヂ内に部屋を見出した。而して會員總會の賛成を得て一七七四年移轉し、此處にロイド組合が設立せられたのである。而してロイド・コーヒー店時代を終つてロイド組合時代に於けるイギリスの海上保險史が展開せられるに至つたのである。

### 三 ロイド組合の成立——アンガースタイン時代

一七七四年ロイド組合がローヤル・エクスチェンデ内に設立せられてから、一八二四年即ちアンガースタインの死後一年に始まる海上保険の獨占の崩壊に至る迄の間は、ロイド組合の歴史に於ける第二期を構成し、これをアンガースタイン時代と稱することが出来る。此時代は一九一四年より一九一八年に至るヨーロッパ戦争當時及び直後の好況時代を除き、ロイド組合未曾有の大繁榮時代であり、保険業者の黄金時代であつた。而して事業擴張の機會は、一七七五年より一八一五年に至る海戦によるところが極めて多い。海上保険を研究する者は、海戦が船舶及び積荷を海上の危険のみに對し、若しくは海上の危険と戦争の危険との兩者に對して擔保する保険業者に、非常なる繁榮の時期を招來する効果のあることを教へる。これに就ては數個の理由がある。第一に交戦國は各種の貨物を多量に輸入する必要を見、戦争による損失は輸入貨物の數量を一層増加せしめ、其結果保険に付せらるべき海上輸送品の種類を増加せしめる。第二に需要の増加は船舶及び積荷の價格を著しく騰貴せしめ、保険に付せらるる取引の數量を増加せしめる。以上の原因の他に戦時に於ける損失の發生する可能性は多數であり被害が莫大であるから、商人及び船主は保険に付せずには置くことが出来ない。これに反して損失の危険が非常に増加せることと事業が豊富になりたることによりて、保険料率は非常に騰貴し、通貨膨脹の結果と合して戦時

に於ける保険業者の利潤を大ならしめる。ロイド・コーヒー店の保険業者は斯の如き経験を経たのであが、それは極めて短期間に過ぎず、間もなく戦後の不況に遭遇せざるを得なかつた。(戦争の危険に對してはロイド組合の保険者は如何なる取扱をなし、又如何なる影響を受けたか。それに就てはライト及びフエイルのロイドの歴史 (Wright & Fayle, History of Lloyd's, pp. 176—239.) を参照して戴か度らう)。

然るにアンガースタイン時代に於ては四拾年に亘つて海戦が繼續せられ、ロイド組合の保険業者は非常なる資力を擁する有力者となるに至つた。

それ故に斯かる時代に於ては、有能なる者が指導者の地位に登り容易に名聲を博することが出来ると信せられるが、事實に於ては幾多の困難が横はつてゐた。ロイド組合は合法的保険業に従事する者のみから組織せられて居らず、組合の繁榮に對して反感を有しその獨占を破壊しやうと試みたる者も少くない。又ロイド組合に参加せるが故に彼等に課せられる重大なる責任を負擔せざるにより、彼等の組合を内部から破壊することも容易であつた。それ故に非常に有能なる指導者を得るに非ざれば、ロイド組合の前途は危殆に頻する有様であつた。斯かる時に現はれたる指導者が、ロイド組合の父と稱せられるアンガースタインであつた。

ジョン・ヂュリアス・アンガースタイン (John Julius Angerstein) はゲッチンゲン附近の同名アンガースタイン村の出身であるが、一七三五年セント・ピーターズブルグに生れ、年若くしてロンドンに來

り拾四歳の時アンドリュー・トムソン (Andrew Thompson) の店に入つた。彼はロシアと通商する商人で且つロイド組合の保険業者であつた。後アンガースタインは二十一歳にして早くも自ら商業と保険業を營むに至り、合名會社の主なる社員として活動した。彼がロイド組合の運命を支配するに至る第一歩は、前述の一七七一年の七拾九名の委員會と、其後に於ける五拾四名の委員會の時に始まり、何れも名簿に彼の名を見出すのであるが、彼は一七七三年に至る迄委員會には參加しなかつた。此年彼はフリーマンス・コートに移轉することに反對し、ロイヤル・エクスチェンヂに移轉する動議を提出した。而して彼は一七九〇年委員會の委員長となり、一七九六年迄此の地位にあつた。アンガースタインはウィリアム・ピットの財政顧問の一人であり、一七九三年政府の信用の極めて低かつた當時に於て、殆んど唯一人で大藏省證券を以て莫大の借款を擧げたる責任者であつた。彼は又一八〇二年公債四萬三千ポンドの基金を擧げ、イングランド及びアイルランド沿岸に救命艇を備付ける事業を開始し、一八二四年獨立の團體を組織した。これが今の國民救命艇協會 (National Lifeboat Institution) の前身である。次で一八〇三年七月二十日愛國基金を作成する爲め委員會を創設し、先づロイド・コーヒー店に於て七十萬ポンドの醵金を得、各方面から多大の援助を受けた。例へばイングランド銀行及び東印度會社から各五千ポンド、ロンドン市から二千五百ポンド、魚商、金匠、食料品商、仕立業、皮革商等から各一千ポンド、兩海上保險會社及びサン火災保險組合から各二千ポンド、其他百ポンド乃至千ポンドの醵金者は、商人、

商事會社多數に涉つた。この基金は其後國家が管理することとなり、ロイド組合の手を離れた。而してアンガースタインは一七九六年保險會社新設に反對する委員の一人に擧げられ、一八一〇年には議會に證人として召喚せられ、遂に所期の目的を達した。アンガースタインは一八二三年八十八歳を以て歿したが、事業を離れて彼は美術方面に大なる關心を有し、其蒐集せる四拾枚の繪畫はイギリス政府が六十萬ポンドを以て買上げた。現にそれは國民美術館の中心となつてゐる。

偕てロイド組合の歴史に於て、第一に研究すべき點は其の經營制度であるが、初期に於てはエドワード・ロイド及び其後繼者が支配權を實行する以外には、其處に集合する商人及び保險業者の共同の事務を處理する必要は無かつた。然るに一七七〇年海上保險業に従事する者がポープス・ヘッド・アレーに移轉したる時、凡そ十二名乃至二十名より成る委員會が組織せられ、組合員共通の福祉に關する事務を處理することとなつた。此委員會は内務委員會と稱せられ、委員は終身選任であつたが、其重要事項に關して提出する動議は、保險業者の會員總會が統制した。實際に於て組織らしき組織は極めて少く、組合員の加入制限又は組合員の従事する取引の制限は殆んど皆無であつた。當時に於ては賭博者の分子が組合員中にもあり、其契約はあらゆる事故に及び、賭博に過ぎざるものも多くあつた。其中でも病氣と傳へられる名士の生命を保險する習慣は、最も非難せられたるもの一つであつた。斯の如き性質の取引に對して世間の注意が向けられたのは當然であつて、一七四六年（ジョージ二世第十九年）に賭博的契

約を禁止する法令が發布せられたが、それは效力の極めて尠いものであつた。それ故に眞面目に事業に従事せんとする保険業者が斯かる状況を憂へてゐた。新ロイド組合を組織せる重要な動機の一つは、自ら斯かる取引と關係を斷つことにあつた。併し乍ら新ロイド組合は賭博者的分子を排除することが非常に困難であることを見出した。一七二四年の會員總會に於ても、斯くの如き契約を拒絶し、爾來斯かる契約に關係せる仲介人に對して好意を示さざることを勧める決議をなし、其後にも同様の決議をなしたが實際的效果は見へなかつた。

斯の如き制度の下に於て事務所の統制は内務委員會が任命せるマスターの手にあつた。本來マスターとはコーヒー店等の所有者を呼んだのであつた。而して保險關係者がポープス・ヘッド・アレーに移轉したる後も、従來のコーヒー店としての組合の經營と同様の形式を取り、給仕人の一人をマスターに選任し、部屋の支配を行はしめ、給仕人の統制、家賃、其他諸費用の支拂を司り、筆墨、新聞、飲物等の供給をなし、組合に到着せる海運に關する報告を分類し流布せしめる責に任じた。斯の如き地位は普通の有給役人よりも重要なものであり、エドワード・ロイド自身の地位に酷似し、事業収益のかなりの部分を給與せられた。ロイド組合が一七七四年三月五日土曜日にローヤル・エキステンヂに移轉したる時、マスターの地位はトーマス・フィールディング (Thomas Fi Iding) が占め、トーマス・テイラー (Thomas Taylor) がこれを助けた。テイラーは純収益の四分の一を受ける條件で任命されたのであつた。

其後フィールディングが死亡したる後を承けてテイラーがマスターになつた。而して彼は毎年百ポンドをフィールディング未亡人に支拂ふ約束であつた。

一七九六年三人のマスターが任命せらるることとなつた。而して其中の一人が缺けるもこれを補充しない規定であつたが、これは一八一一年改正せられ、常に三人のマスターを置くことに改めた。二人の者は二個の部屋の酒賣場に働き、残りの一人は他の二人のなし得ざる仕事に従事するのであつた。當時の記録に依れば、事業の収益以外に自ら組合員各自より毎年三ギニーを受け、給仕人は一ギニーを受けてゐた。三ギニーの中から家賃、租税を支拂ひ、石炭、蠟燭、筆墨、新聞、其他の品物を購入しなければならなかつた。又マスターは書記の役目を持ち、組合員全體の爲めに認められたる手紙に署名する權能を有してゐた。然るに一八〇四年拓務及び陸軍大臣たりしケムデン伯がロイド・コーヒー店の給仕人と通信を交換することに反對したる爲めに、別に書記を任命することになつた。而してマスターなる名稱は其後暫く存続したが、一八四四年即ち第十九世紀の中葉に至つて遂に廢止せられた。

アングロスタイン時代に於けるロイド組合の保險業者が、廣く海外に於て事業を經營し頗る繁榮せるを見て、多數の有力なる人士は同業を開始せんことを希望し、新設會社に出資する計畫を樹てた。併し乍ら斯かる計畫は、先づローヤル・エクスチェンジ保險會社とロンドン保險會社とを設立せしめ、資本合同會社として海上保險業を獨占せしめたる一七二〇年の法令を、徹廢しなくては實現不可能であつた。



然るに一七九八年にはグローブ火災生命保險會社が、海上保險業をも經營し得る特許狀の下附を願出でたが、却下せられた。それは主としてロイド組合に屬せる下院議員の努力によるので、其後に起りたる計畫も盡く失敗に終つた。

一八六〇年グローブ保險會社は一時其計畫を斷念したが、一八〇九年末に至つて多數富裕なる商人が資本金百萬ポンドを以て保險業に着手すべき新しい計畫を樹て、一八一〇年議會に請願書を提出して、ローヤル・エキスチエンヂ及びロンドンの兩保險會社の獨占を廢止するか、又は自己の會社の設立を許すべきことを願出で、それと同時に再びグローブ保險會社が請願書を提出した。これは一月二十九日ロイド組合が會員總會を開催して對策を審議し、十四名の委員を任命した程各方面の支持を有したものであつた。アンガースタインは此委員の一人であつたが、保險業者であつて下院議員であつたジョセフ・マリエット (Joseph Marryat) がロイド組合の爲めに議場に於て雄辯を揮ひ、其仕事を大ひに援助した。又當時存在せる二個の海上保險會社も、ロイド組合の保險業者と友誼的關係にあつて、新計畫に反抗した。それにも拘らず、新しい會社の發起人は下院に於て可成多數の支持を得、一八一〇年下院に於ては、一七二〇年の法令を研究し、當時のイギリスにある海上保險を實行する方法及び其實際狀態を研究する爲め、特別委員會を組織することとなつた。

特別委員會はウィリアム・マンニング (William Manning) を委員とし、ブローガム、ハツキンソン、メ

ーン卿等の名士を中立委員として、非常に廣汎なる調査をなし三十六名の證人を訊問した。其證人の中十四名は保險業者又は仲介人であり、他は船主及び商人であつた。此調査に方り賭博的慣習と保險金支拂の義務を履行し得ざる保險業者が頻繁に現はれたる廉とを以て、ロイド組合を非難する請願が行はれた。併し乍ら斯の如き非難に對してアンガースタインは極力反對を試みた。彼はロイド組合が義務を履行し得ずとの非難に對して、實際の數字を示して反對したるのみならず、保險契約者の側に錯誤あり又書類を提出すること能はざりし場合にも、義務を履行せる多數の實例を示した。又彼はロイド組合の行へる方法によりて、資本合同會社の方法よりも便利に海上保險業を經營し得ることを主張し、その實例としてロンドン及びローヤル・エクスチェンジ兩保險會社の事業成績に攻撃の鋒先を向け、外國會社の失敗を論じ、一轉してロイド組合の保險業者各自の間の競争によりて、會社組織に於けるよりも有利なる條件を船主及び商人が得ることを主張した。

斯の如き有力なる證言があつたにも拘らず、委員會は一七二〇年の法令の廢止に賛成の報告をなした。これはロイド組合の方法の缺陷によるにあらずして、寧ろ現存する二個の會社が船主及び商人の要求を充すことが出来なかつたことに原因する。委員會の報告は其主旨を述べるに何等曖昧なる語を用ひなかつたが、本會議は此報告を否決した。投票は可とするもの二十五に對し否とするもの二十六で、僅に一票の差であつた。其主要なる理由は、新設會社の競争によりロイド組合の崩壊を來し、外國貿易關係者

に非常に價值ある商業通信の制度を失はしめると云ふにあつた。斯の如くして新會社を組織する計畫は無効に終り、更に十六年間海上保險業界は平和を持續した。

議會に於ける調査の結果はロイド組合に好都合であつたが、委員會の蒐集せる證據はロイド組合の組織及び管理に幾多の缺點のあることを曝露した。それはバルチック海方面に於ける海軍及び政治界の動靜に關する報告をロイド組合の書記ジョン・ペンネット (John Bennett) が公表せざりし事が、同方面の多數莫大の損害の發生に關聯して問題視せられたることを動機とした。それ故に自己防衛の爲めに組合員は整理に着手し、一八一一年四月二十一名の委員を擧げた。此委員會はアングースタインの後を承けたるマリエットを委員長とし、ロイド組合の組織改造の問題全般に關する詳細なる研究をなし、會員總會に對して若干の勸告をなしたが、其大部分は可決せられ直に施行せられた。それは各方面の事項に涉つたが、特に書記の選任、海事報導の擴張に關するものが多かつた。而して熱心なる討論が行はれたる後、内規が可決せられた。それは一七九六年と一八〇〇年の決議を基礎とするが、新しき規定も少くなかつた。組合員及び代理人の資格に關するものの外、改革の重要な點は次の如くである。第一に組合は十二名の委員がこれを統治し、此中三名は毎年順次に交替することに會則が改正せられた。第二に一名の會長と統治委員會の互選せる三名の委員よりなる財務委員會が、會員の受託者として活動する爲めに組織せられた。第三に通信委員會が組織せられ、年俸二百ポンドを以て一名の書記が毎日執務するこ

となつた。第四に外國に於けるロイド組合の代理人は管理委員のみが任命し、保險業者各自が任命する制度を廢止することとなつた。第五に組合の經營に就いては詳細なる規則を設けた。第六にロイド組合の選舉に於て被選舉權を有する者は、商人、銀行家、保險業者、保險仲介人と明確に指定せられ、且つこれ等の者は一定の規約を實行しなくてはならなかつた。

ロイド組合の組織の改造が實行せられるに至り、アンガースタインは七十六歳で尙ほ元氣は衰へなかつたが、一八一一年八月事業界を引退し、爾後何等公事に關與せざるに至つた。併し乍ら彼の勢力の結果たる組合の方針はジョセフ・マリエットによつて踏襲せられた。マリエット時代には内務委員を有給とし、各地にロイド代理人を始めて設置した。これは間もなく其有效なることが實際に立證せられ、益々擴張せられるに至つた。次でアメリカとの戦争に於て戦争危険の問題が起り、國內に於ては海上保險證券の印紙税、假證券禁止問題が起り、内外多事であつた。マリエットは一八二四年二月歿するまで、統制的才能と豊富なる常識を以て、是等の諸問題の解決に努力した。

#### 四 其後のロイド組合

ロイド組合の歴史に於ては、一八二四年の獨占の崩壊より現在に至るまでを第三の現代期とする。而してこの現代期は、海上保險業に従事せる者の資産に尠なからざる變動を生じたる點に於て、アンガー

スタインの黄金時代と極端なる對照をなしてゐる。ナポレオン戦争直後、イギリスの通商は停頓し保險業は非常なる不況に苦しんだ。然るに徐々に事業界は復活し、ロンドン及びロイド組合は世界に於ける海上保險の主要なる市場となつた。而して一九一四年より一九一八年に至る世界大戰は再び非常なる好況を齎し、次いでアンガースタイン時代の終に於けるが如き不況を生じた。斯の如く事業の浮沈ありしにも拘らず、ロイド組合は世界的名聲を博し不況時代には組織の改善に努め一層の發展を圖つた。

改善の第一着手は船舶の登録に關係して爲された。船舶の登録は一七六〇年ロイド・コーヒー店の保險業者によりて創始せられ、協會加入者のみが之を極秘に利用してゐたが、一七七九年に至つて船主に對して不都合の分類方法が採用せられたので、船主は獨立の競争的協會を組織した。後者の登録簿を赤本 (Red Book) と言ひ、これと區別する爲めに前者のものを青本 (Blue Book) と稱する。而してこの競争的協會の成立は前者の規約を緩和する効果が少くなかつたが、兩協會は何れも財政困難に陥り、一八二三年以來合同運動が起つたが、容易に實現せず、十年を経過して財政困難愈々激しくなり、其儘に放任すれば共倒の窮狀となつたので、漸く一八三三年十月に至つて所謂ロイド船舶名簿 (Lloyd's Register of British and Foreign Shipping) に統一せられた。ロイドといふ名稱を冠したのは、一七六〇年のロイド・コーヒー店時代の古い登録を直接繼承したといふ意味を藏するのである。

次にこれよりも重大なる方面の改善が起つた。一八一二年會社組織の特許狀を徹廢する運動が繰返さ

れたが、一八二四年はこれに好機會を與へることとなつた。而して從來ロイド組合とロンドンシ及びロイヤル・エクスチェンヂ兩保險會社とが握れる海上保險業の獨占は、此年に至つて遂に最期となつた。傳ふる處によるとそれはロスチャイルド家の基礎を築いたネーザン・ロスチャイルド(Nathan Rothschild)の從兄弟に依つて惹起された。彼はユダヤ人なるが故に保險業者たることが出来なかつた。其不平を訴へられたるロスチャイルドが自己の保險會社を設立しやうと計畫し、一七二〇年の法令を廢止する運動を起す爲めに其勢力を用ひ、首尾よく其目的を成就した。其處でロスチャイルドはアライアンス保險會社(Alliance Assurance)を設立し、彼の從兄弟を保險業者たらしめたと云はれてゐる。但しアライアンス保險會社が其創立百年記念に出版したる小冊子によれば、これと幾分事情を異にする。併し乍らロスチャイルドが一七二〇年の法令を廢止する主要なる契機をなしたることは事實である。彼はアライアンス・イギリス及び外國火災生命保險會社を設立し、次で海上保險業を經營する特許狀を議會に請求し、斯くてこれを動機に一七二〇年の法令が廢止せられたのであつた。

併し乍らロスチャイルドは他の困難に遭遇した。それはフレデリック・ナツシュ(Frederick Natuseh)と稱するロイド組合の保險業者が新設會社の株主となり海上保險業に着手するや否や、彼はロスチャイルドを契約違反として訴へ敗訴せしめた。其處でロスチャイルドは直ちに名目上のみ獨立せるアライアンス海上保險會社(Alliance Marine Insurance)を新設してこれに對抗した。又此年インデムニティ相互

保險會社 (Indemnity Mutual Assurance) を始め、其他の會社が設立せられた。併し乍ら多數の小規模の會社は何れも失敗した。

ロイド組合は一七七四年以來ローヤル・エクスチェンヂに安住してゐたが、一八三八年一月十日午後八時、其建物の船長集會所から發火して建物全部を灰燼に歸せしめ、これが爲めにロイド組合も組合員も多大の損失を蒙つた。而して一時南海館 (South Sea House) の廣間に移りて事業を繼續し、一八四四年十月二十八日新にローヤル・エクスチェンヂが建築せられると、十二月二十六日再び元の位置に復歸した。此間の六ケ年間に於ては特に記すべき事件は餘りなかつた。

ロイド組合は獨占の崩壊より凡そ一八七二年に至る迄最も繁榮せざる時期を經過した。それは多數の海上保險會社が組織せられ競争が起りたることに原因し、破産するもの解散するもの續出の有様であつた。外界の事情が斯の如くなりし時、ロイド組合の會員は再び内部の問題に注意を轉向した。而してそれは先づ一八二八年の委員會に對する攻撃に其端を發し、財政上の問題を追及し、委員に對する報酬の支給を廢止する案を總會に於て討議するに至つたが、此問題は一八三四年報酬を減額する妥協案を以て落著した。次に役員の問題が起つた。それは委員會が組合長に上げたるトムソンは、新設會社たるサンダーランド海上保險會社 (Sunderland Joint Stock Marine Premium Insurance) の社長である爲め會員の反感を買ひ、一八三三年十二月辭任を餘儀なくせしめられた。これより二ヶ月後にはロイド組合の書

記ジョン・ペンネットが死亡した。彼は一八〇四年以來滿三十年間書記として獻身的努力を惜まず、ロイド組合の爲めに貢獻するところが誠に多大であつて、彼の死は無限の損失であつた。

次にロイド・リストはロイド組合自身の發行に係り、前述せる青本がロイド組合より獨立せる機關のものであつたのと其趣を異にしてゐるが、競争的刊行物を有せるは全く其軌を一にしてゐる。それは遞信省の書記の發行せる海運通商彙報 (General Shipping and Commercial List) で日刊であつた。然るにロイド・リストは一週二回火金の兩日發行で、到底競争することが出来なかつたので、一八三七年七月一日以後日刊に改め、一方遞信省の彙報は發行中止に決定したので、豫期せるが如き財政上の困難を経験せずして濟むだ。而して一八五四年には紙幅を擴張し廣告を掲載したが、一八七〇年以來收益が漸次減少を示したので、從來の夕刊を朝刊に改めた。尙ほ一八七二年には改題し、一八八四年には他紙と合同した。これが現在のロイド・リスト (Lloyd's List and Shipping Gazette) の變遷である。

ロイド組合は一八四四年十二月ローヤル・エクスチェンヂに移轉したが、此同じ一八四四年に資本合同會社登記法が通過し、一ヶ年内に十三の海上保險會社が組織せられたが、其内三年存続したるものは僅に一社のみで、他は何れも短命にして破産解散の運命に遭つた。而して一八六〇年代にはアメリカの南北戦争の結果としてイギリスの海上保險が多忙を極めたが、新設會社は不健全のものが多く、早晚危機の到達が豫想せられた。ロイド組合の優勢を以てしても、不當に切下げられたる保險料率では保險事



業の有利ならざることを證明し、組合員たる保險業者も投機に手を染めたる者の如きは、事業の失敗を曝露するものが少くなかつた。それ故に一八五一年十二月新なる内規を以て、破産せる者は自然に會員の資格を喪失することを規定したが、斯の如き制裁規定よりも防止規定の必要を主張せる者があり、一八五五年には委員會を設置して、臨時に擔保を徵收する案を研究したが、委員會は根本的改革案の提出を躊躇し、殆んど二年を無爲に空費した。併し乍ら事態は益々惡化する傾向があるので、會員をして法律上の保證方法を講せしむる案を立てたが、これも數年間總會に提案せられるに至らなかつた。それが漸く表面化したのは一八六五年で、此時には保證制度を樹てることとした。而して其後任意積立金制度も立案せられ、一八七〇年には之を強制的に施行しようと計畫し多數を以て可決した。此制度はソロモン・イスラエル・ダ・コスタ (Solomon Israel Da Costa) の主張に基くのである。

一八七〇年ベニズエラ號の事件を動機として、ロイド組合は法人組織の法令を得るに努める決心をなした。十一月二十九日ロイド組合法案が起草せられ、議會に提出せられ、主として當時の書記ビー・シー・ステイブソン (B. C. Stephenson) の努力に依つて、一八七一年首尾よく法人特許狀が下附せられた。此特許狀は組合員が海上保險業を行ふこと、船舶、積荷及び運賃に關して組合員の利益を擁護すること、海運に關する報導を蒐集し公刊し分布することの三つを組合の特權と認めた。これに依ればロイド組合の事業は海上保險業に局限せられた。勿論これは組合員各自が他の種類の事業に従事することを

妨げるのではないが、團體としてロイド組合がそれを援助し統制することは出来ないものであつた。従つて海上保険以外の保険に對する要求が増加するに連れて、特許狀を改正する運動が起り、一九一一年遂にその目的を達した。即ちロイド組合の目的は次の如く擴張せられた。各種の保険及び保険業を組合員が行ふこと、組合員が實行する事業に關し、又海運、積荷、運賃、其他被保険物に關し、組合員の利益を保護増進すること等である。

凡そ一八七二年から海上保険業は徐々に繁榮に赴き、一九一四年ヨーロッパ大戰の勃發によつて急激に事業が多忙となり、ロイド組合の保険業者及び保險會社に巨富を齎した。交戰國は殆んど無制限にあらゆる種類の食料品を要求し、船腹が不足を告げ、斯かる異常なる船舶と貨物に對する需要は價格を騰貴せしめ、航海は出来るだけ高速度に行はれ、船舶が新造せられ、保險料率が引上げられ、殊に戰爭の危険を擔保する保險料率は高騰し、莫大の損失が発生したが、保險者の收入せる保險料は一層多大であつた。それ故にロイド組合に加入する新保險業者が増加し、新會社も増加し、大戰の終熄せる後一、二年間繼續する好況時代に於ては、尙ほ十分の仕事が存在した。併し乍ら避け難き好況の最期は事情を完全に一變せしめ、此數年間は海上保險業者の未だ經驗せざる難局に立到つた。事業の梗塞と價格の低落とは、保險市場の供給過多より激烈なる競争を惹起し、事情を急速に悪化せしめた。多數の新設會社は失敗し、ロイド組合の保險業者中には破産したる者は無かつたが、多數の者が事實上事業界から引退し

た。現在に於ても事態は殆んど改善せられず、破産整理は止むだようであるが、保険料率の引下は未だ熄まず、事業の數量は餘りに過少である。而して何等見るべき改善の兆候はないが、ロイド組合は依然として海上保険界の中心として儼存してゐる。最後にロイド組合は一九二三年末に至つて、レッヂンホール街の東印度街地として知られたる敷地を購入し、此處に自己の建物を建築すべきことを發表し、一九二五年起工し一九二七年竣成した。それは總建築費一百萬ポンドを投じ、保険契約室、各部事務室の多數を有し、ロイド組合の威容と傳統とを辱しめない大建築である。

以上を以て極めて概括的なるロイド組合の歴史の敘述を了へた。それ故に現代のロイド組合の有する事務組織に言及して此論文を終ることとしよう。先づ事業實體としてのロイド組合と、個人保険業者の集合體としてのロイド組合との區別を、明瞭に記憶して置かねばならぬ。ロイド組合自體は保険契約を引受けもしなければ、組合員の契約上の義務の保障をもしない。ロイド組合は、株式取引所が證券の賣買の爲めに存在すると同じ方法に於て、保険契約を締結せしむる爲めに存在する。ロイド組合の事務は組合員全體から選任せられる委員會によつて處理せられる。其委員は總數十二名より成り、委員中より組合長及び組合長代理を選任する。而して委員は三年の任期を終へたる者が毎年順次に交替するのであつて、委員は退任後一ヶ年を経過するにあらざれば再選せられることが出來ない。尤も組合長の場合には別であつて、彼は退任後直ちに委員に選任せられ得るのである。

ロイド組合の組合長は、非常に名譽ある地位であると共に又非常に重要で種々の義務を有する地位である。彼は組合の事業に注意を拂ふことを期待せられるのみならず、外部に對して代表者として活動しなくてはならぬことが頻繁に起る。組合長代理は組合長を補佐し其不在の時には之が代理を務めるのである。委員會はロイド組合法令の規定による保險及び海運に關する一切の事件に就て組合員共同の事務を處理し、組合員の利益を擁護することを其任務とする。而して各部の仕事と管理上の仕事は、委員會の下にある各部の部長が統轄する五百名の事務員がこれを處理してゐる。嘗て此種の事務上の統制は組合秘書(Secretary)を通じて行はれたが、一九二二年以來二名の委員會書記(Clerk)を通じて行はれることとなつた。

而してロイド組合の事務は部屋の管理、規約の監理、報導の蒐集分布、奉仕部の維持の四つに分類することが出来る。部屋の管理は各部の事務室、讀書室、參考圖書館等の整理を云ひ、奉仕部の維持は契約及び保險金請求の代理を爲すことである。而して此内最も重要なものはエドワード・ロイド以來繼續せる報導の蒐集分布であること勿論である。ロイド組合の代理人、ロイド組合の信號所、無電局、其他船長及び海損精算人等から得る各種の報導を、ロイド組合の部屋に掲示し、親展報告を發行し、又は各種の公刊報告書を以て發表するのである。公刊報告書にはロイド・リスト(Lloyd's List and Shipping Gazette) ロイド週刊要録(Lloyd's Weekly Summary) ロイド日刊索引(Lloyd's Daily Index) ロイド

積込表 (Lloyd's Loading List) ロイド損害週報 (Lloyd's Weekly Casualty Reports) ロイド親展索引 (Lloyd's Confidential Index) ロイド年報 (Lloyd's Calendar) 等がある。

規約の監理に關しては保險業に従事する組合員の加入の決定がある。加入希望者は少く共六名の組合員の推薦を有し、且つ推薦者の中の一名は委員會に出席して、加入希望者の國籍、財産其他の状態を證明しなくてはならぬ。而して綿密に調査を遂げたる後、委員が投票を行ひ、過半数の賛成を得たる場合に初めて加入が承諾せられるのである。而して加入するには海上保險契約の精算の爲めに尠く共五千ポンドの積立金をなし、保險料に關して信託契約に調印し、保障保險契約又は現金預託をなし、加入金五百ポンドと毎年の組合費三十ポンドを納付し、事業報告を委員會の承認せる會計士に検査せしめ、義務履行に必要な財産を準備する保障をなすことを條件とするのである。(完) (昭和七年六月四日稿)

(附記) 此論文は記述の順序を主として Lay, Marine Insurance に據り、其の参考資料としては主として Wright and Fyfe History of Lloyd's に據りて吟味することとし、若干の部分に就ては Dover, Handbook to Marine Insurance をも参照した。Lay の著書は本來教科書たることを目的としたものであるが、記述の簡潔に要約せられたる點を學ぶべきであらう。但し歴史的研究を主眼とするものでないから、可成重大な誤謬を犯してゐる個處もある。それ故に資料としては餘り尊重することが出来ない。Wright 及び Fyfe の著書はロイド組合の委員會が一九二七年の新館落成紀念事業として編纂せしめたるもので、現存する記録を廣汎綿密に調査研究し、從來の著書に現はれたる誤謬缺點を指摘し、又多數の新事實を發見し補正してゐる權威的勞作である。併し乍ら其全貌を紹介することは紙幅の到底許さぬ處であるから、前述の如く Lay の記述の順序を藉りて、彼此對照の上、重要項目

のみに就き概要を示すに止めなくてはならなかつた。尙ほ Wright 及び Eayle によりて、從來久しく權威を以て許されてゐた Martin の History of Lloyd's and of Marine Insurance は資料に就き原本からの直接の引用に於ても信頼し難き點が尠くないことが斷言せられてゐる。最後に若干の参照に資したる Dover の著書は簡明なる歴史を第一章に掲げてゐるが Lay 又は Wright 及び Eayle の論及して盡きざる個處、殊に法令の内容等の記述に就て勝れてゐるところがある。勿論これは表題の指示するが如く、保険論全體に關する提要であつて、敢て歴史研究ではない。若し此論文に於て多く論述せざりし十九世紀初葉の戦争と海上保険の關係、ロイド組合内部組織、就中組合員の義務等の詳細を知らんと欲する者は、先づ第一に Wright 及び Eayle の著書に據るべきであらう。